

40. 下高野街道

所在：北田辺 1 丁目～矢田 7 丁目

律令制度の崩壊によって、天皇家が奉祭する神道^{しんとう}が衰退し、熊野詣^{くまのもうで}がすたれると共に大衆仏教が興隆し、真言宗総本山の高野詣^{こうやもうで}が京都の天皇や公家ばかりでなく武士や庶民にまで広がりました。そこで、京都方面より大阪を通り高野山に行くには、淀川を舟で下つて大坂(堺、天満、平野)に上陸し、その後に下記の 3 つの陸路での高野道が伝わっています。また京都から陸路のみで高野山に詣でる道として東高野街道があり、都合 4 つの高野街道があるのですが、その呼び名や認識に混乱があるようで、下記に整理します。さらにこの街道は、大阪(天王寺、平野)や堺と、松原や狭山との間の村々を結ぶ生活道路としても発達したので、この街道はかなり曲がりくねっており、長距離の街道となったものと推察されます。

○ 高野街道について

高野街道は狭山と高野山を結ぶ街道ですが、長野で東と西の高野街道に分かれ、さらに西高野街道は狭山より北に 3 つの街道に分かれており、それぞれ堺に向かって西高野街道、天王寺に向かって下高野街道、平野に向かって中高野街道(上高野街道)と呼ばれています。

大阪から高野山に詣でる 3 街道（登り方向に表示）

1. 西高野街道

堺旧市街から東進し、中百舌鳥、初芝、北野田、山本、岩室、今熊(狭山池西南・亀ノ甲付近)、茱萸木^{くみのき}(※)とほぼ国道 310 号線に併行しており、北西から南東へと抜ける道です。平安末期から高野山詣での街道として、室町から江戸時代には旧堺港から高野山への貨物輸送で賑わった街道とされています。



(次ページへ続く)

※ 茱萸木

正しくは「グミノキ」ですが、鎌倉時代の大政官記録ではこの地名を**久美丘**としていたので、古伝承を尊重して大阪狭山市の昭和45年（1970年）の議会で、「クミノキ」を正式な町名とされました。

2. 下高野街道

天王寺（大道）から矢田地区の中央を通り、下高野橋で大和川を渡って南下します。

堺市北野田を経て、狭山の池尻から、池の西側である池之原を通り、今熊で西高野街道と合流します。

3. 中高野街道（旧称「上高野街道」）

平野（杭全神社西の泥堂口）から南進し、瓜破を経て大和川の高野大橋（江戸中期まで橋がなかった）を渡り、阿保の茶屋では、堺東を東に向かう長尾街道と交差し、岡で竹之内街道と交差し、東野（菅生神社付近）を南下し、狭山池尻から、池の東側を南進し、半田をほぼ北から南に縦断して、茱萸木で西高野街道と合流します。

京都から陸路のみで高野山に詣でる街道

東高野街道（京都から生駒山系の麓に沿って北麓から西麓を辿るコースです）

八幡（京都府八幡市）→洞ヶ峠→河内国田口村（大阪府枚方市）→郡津村（交野市）→中野村（四條畷市）→豊浦村（東大阪市）→楽音寺村（八尾市）→安堂村（柏原市）→国府村（藤井寺市）→誉田村（羽曳野市）→富田林村（富田林市）→長野村（河内長野市）、ここで西高野街道に合流します。

○ 東住吉区内の下高野街道について

寺田町駅西側あたりで奈良街道から分岐する場所を基点とし南下、JR環状線、JR関西線、[国道25号](#)（天王寺駅方面）と交差し、JR阪和線沿いに美章園駅にいたりますが、ここから東南へ約100メートルは消滅しています。しかし、[榎神社](#)の東で復活し北田辺小学校東側を通過、松虫通をこえて東西に走る[庚申街道](#)と交差します。その後、南下をつづけ現田辺一丁目の大念寺と安楽寺の間を抜け、南田辺村（現田辺一～四丁目）に入る。南田辺本通商店街を抜け[山阪神社](#)の鳥居を右に見ながら東へ折れ長居公園東筋を前に南へ湾曲しながら南港通りへ至ります。ただしこの間は区画整理により消滅しています。

旧街道は南港通りの駒川あたりに出て、その後矢田二丁目で道筋が復活し、南進して[大和川](#)に至ります。その後、下高野大橋を越え、矢田七丁目に鎮座する[阿麻美許曾神社](#)の東を通過して松原市に入り、狭山に至ります。

明治20年代（1887年～1896年）に当時の田邊村、矢田村の有志が道の普請をしたことが記録に残されています。矢田5丁目の戎温泉前にあった「下高野街道土木竣工」の碑は現在、下高野街道の約400m西にある公園南矢田3丁目の矢田富田町墓地に設置されています。

東住吉区内では、北田辺、旧中野村、矢田地区には、現在でも往時の雰囲気が残されており、歴史のロマンに浸ることができる街道です。

長居公園通にほぼ沿っていた街道で、住吉区の浜口町付近に上陸した外国使節がこの街道を東進し、奈良に向かったものと考えられています。

日本書紀の雄略天皇紀に書かれている内容では、「雄略8年（464年）2月条に青と博徳が呉国（※1）に出使し、雄略10年（466年）9月条に筑紫に帰国したが、雄略12年（468年）4月条に再度派遣され、雄略14年（470年）正月条に帰国し、呉の使いと共に機織の技術者を連れて、住吉の津に上陸し、そこに泊った。この月に呉の来朝者のため道を造って、磯歯津路を開通させて、これを呉坂（※2）と名づけた。」と記載されています。

「しはつ」は磯果、磯歯津、四極等と万葉集にも出てくる地名です。



※1 呉国(222年～280年)と雄略天皇紀

宋書の倭王武(雄略天皇)の上奏文、稻荷山鉄劍文字、古事記等の記録から、雄略天皇の在位期間は458年～489年と推定されるので、日本書紀の編者が雄略天皇の時期を約150年誤算して、宋の時代であるべきを、呉の時代としています。

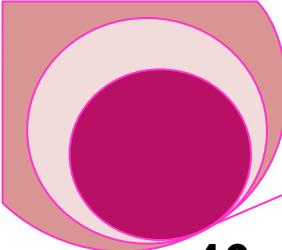
同様に、魏志倭人伝に登場する卑弥呼(?～248年)を神功皇后の時代(好太王碑391年前後)に当てていますので、やはり150年位の誤差があるようです。

※2 崇神天皇の没年では、住吉神代紀により258年と証明されていますが、日本書紀はBC29年と記載されており、290年の誤差があります。

神武天皇が実在とすれば、約660年の誤差と言われていますので、日本書紀の年代を時期により、660年(神武)から0年(推古)の修正をして読み替えると、中国や韓国との史実と一致するとも考えられます。

※2 呉坂(通説は住吉区、東住吉区との説もある)

現在の長居公園通は、長吉長原から浜口町までは、ほぼ平坦な道路で、坂と見られる場所はありませんが、湯里住吉神社や中臣須牟地神社の伝承を繋ぎ合わせると、西除天道川と長居公園通の交差点付近に天神山と呼ばれる小高い丘があったようです。これが、磯歯津路の呉坂と呼ばれた由来ではないかとも考えられています。



42. 常栄寺

所在：住道矢田4丁目5-17

(1) 須牟地(住道)廃寺の塔礎石

住道矢田4(矢田中より西へ230m 矢田東小より南へ150m)の集落の真中にある真宗大谷派の寺院で、境内の雨受けに利用されている石が、寺から北東310mにある須牟地廃寺の塔礎石として有名です。

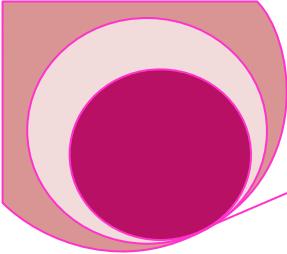
(2) 矢田小学校の発祥地

常栄寺は矢田小学校の発祥地として、大阪市の小学校教育史上有名です。明治6年(1873年)2月にこの寺の本堂を教室として開校し、前身は「河州第33番小学校」と名付けられ、後に元円生病院があった住道矢田1-6付近に、住道小学校として新築されるまで3年間続けられました。明治政府は明治5年(1872年)に新しく小学校の教育制度を発布し、「不就学者をなくすこと、教育を受けられない不幸な人を無くすこと」としましたが、当時のこの村の就学率は43%で、これでも全国平均の32.3%よりも高かったそうです。

(3) 寺の開基等の由緒

第18代住職によれば、信長と石山本願寺との合戦に際して、この地域では、松原市我堂と長居公園付近に掘割を築き、一向宗門徒の砦となり、この辺りも激戦場となったと言われています。この寺は合戦の翌年天正9年(1581年)に浄土真宗の寺院として開基しましたが、徳川家康の政策により、本願寺が東西2派に分裂した時(1602年)に、きょうにょ教如が率いる東本願寺に属しました。





東住吉 100 物語

寺社・史跡・伝承

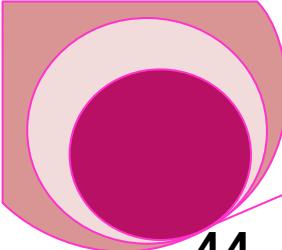
43. 神馬塚

所在：山坂1丁目11-2



住吉大社の神馬のお墓です。なぜ田辺にあるかについての伝説があります。住吉大社の祭神となっている神功皇后が、朝鮮半島に攻め入った時、相手の王が持っている見事な馬を気に入りました。譲るように頼みましたが「この馬だけは譲れません」と拒否されました。家来の野見宿禰（のみのすくね）が「策をもってとりましょう」と張り子の馬を作りました。この馬と競走させて勝てばその馬をもらうぞ」と相手の王に申し入れました。張り子の馬には神がかりのまじないがかけられていました。果たして競争させると張り子の馬が勝ちました。相手の王は「その馬と交換してくれるなら馬を譲る」ということで念願の馬を手に入れました。持ち帰った馬は住吉大社の神馬として飼育されていましたが、ある日行方不明となりました。探しましたが見当たりません。そうした最中、田辺で里人が見事な馬が居るのを見つけました。里人は「これは住吉さんのお馬と違うか」と住吉大社に届けました。住吉大社は「うちの馬だがこの馬は田辺の土地を好んでおるようじゃ。今後この馬の飼育を田辺に任せること」ということで、以後連綿として住吉大社の神馬飼育は田辺の役目となりました。橘という家系が神馬を飼育し、毎日、朝に田辺から住吉大社に連れて行き、夕方に田辺に帰るという日課が伝説の時代から戦時中の昭和 19 年頃まで続いていました。北田辺と南田辺の両村には神馬の厩舎がありました。神馬が亡くなると神馬塚に葬られました。近年、町おこしグループによって神馬が通った道を神馬木馬を引いてたどる「神馬ウォーク」が年に一度行われています。

吉大社に届けました。住吉大社は「うちの馬だがこの馬は田辺の土地を好んでおるようじゃ。今後この馬の飼育を田辺に任せること」ということで、以後連綿として住吉大社の神馬飼育は田辺の役目となりました。橘という家系が神馬を飼育し、毎日、朝に田辺から住吉大社に連れて行き、夕方に田辺に帰るという日課が伝説の時代から戦時中の昭和 19 年頃まで続いていました。北田辺と南田辺の両村には神馬の厩舎がありました。神馬が亡くなると神馬塚に葬られました。近年、町おこしグループによって神馬が通った道を神馬木馬を引いてたどる「神馬ウォーク」が年に一度行われています。



東住吉 100 物語

寺社・史跡・伝承

44. 住道(須牟地)廃寺跡

所在：住道矢田8丁目3



矢田中学校から北西部 30m に藤原不比等(659年～720年)が建立し、僧玄昉が開基したと伝える寺跡があります。

平安末期の兵火(源平合戦)にかかり焼失したと言われる大きな寺院で、古瓦や塔芯石が確認されています。

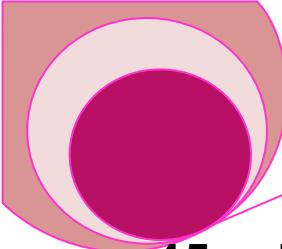
中臣須牟地神社と共に、初期の中臣氏(藤原氏)との関わりの深さが推察できます。寺跡に大きな塚が立っており、寺が兵火で焼けた際の灰を集めたら、この塚になったと言われています。

石の塔芯礎が、ここより南西 310m にある常栄寺の雨受けに転用されていますが、寺院規模や伽藍配置は確認されていません。

芯礎石の大きさは底辺 167cm、高さ 150cm の正三角錐台。芯礎石の中央にある柱穴の直径は 67cm、深さは 16cm のようですが、手水鉢に加工した際に、より深くえぐったようで、寺内の説明板には赤く描いて舍利骨の穴がえぐり取られた跡を示しています。

石の材質と加工の状態から奈良時代に造られたものと判定される上に、石に焼けた跡が見られるので、須牟地寺の塔礎石と判定されています。





東住吉 100 物語

45. 鷹合神社

所在：鷹合4丁目5-22

寺社・史跡・伝承

鷹合神社は、当初、鷹飼堂と呼ばれ、祭神は牛頭天王ごずてんのうでした。

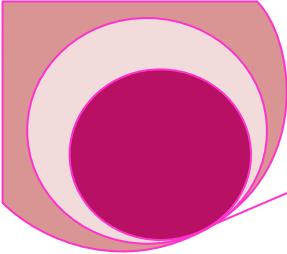
明治5年（1872年）村社の資格を与えられ、地名にちなんで鷹合神社と改められました。住吉神社の旧神官青蓮寺という家の記録の中に、延徳元年（1489年）8月云々、鷹合の祭り云々とあるので、創祀はその以前と考えられます。

境内にある「楠の古木」は、昭和55年（1980年）10月大阪市条例により「保存樹木」としての指定を受けました。

神社東南角の房本宅内に、鏡池という池がありました。ある日、酒君さけきみ（酒君塚古墳）が鷹の行方を見失い、各地を探しあぐねこの池のそばで思案にくっていたところ、かたわらの椎の大樹にとまる鷹の姿が水面にうつり、喜んでとらえたという伝説があります。



「鷹合」という地名については「日本書紀」仁徳天皇四三年秋九月条に
よさみのみやけあびこ
「依網屯倉阿彌古」が網を張っていると、見たこともない異鳥がかかり、天皇に献上した。天皇は酒君を呼んで尋ねると、これは百濟に多い鷹という鳥で、百濟では鷹で小鳥を捕らえる遊びが流行していますと答えた。じゃあお前が飼って慣らせと命じられ、酒君は『おしかわのあしお』というものを脚に、尾に鈴をつけ、訓練して再び帝に差出す。帝は大いに喜び百舌野で狩猟され、多くの雉を捕らえる。これはすばらしい鳥だ、もっと増やそうと鷹甘邑と呼んだ」との内容があります。



東住吉 100 物語

教育・健康・福祉

46. 田辺小学校グラウンド

所在：田辺 2 丁目 3—34

平成 17 年（2005 年）より、大阪市の取組みとして田辺小学校において芝生化モデル事業が開始されました。スポーツ活動の活性化や学校の緑化、ヒートアイランド現象の緩和に役立っています。学校・地域・PTA・各種団体が協働して「芝生」を大切に守り育てています。



47. 田辺大根

東住吉100物語

産業・商業

古代の大坂の地形は上町台地と生駒山脈の間（現在の河内平野）が内海でした。長年の大和川や淀川が運ぶ土砂の堆積によって海水は汽水となり次第に野菜耕作に適した砂質土壤が形成されました。特に江戸期には大和川の付替工事により、河内平野が広大な干拓農地となり、野菜や木綿の生産地となりました。

また、江戸時代、大坂は各藩の蔵屋敷が集まり、米とともに全国の特産物が集まりました。商業、金融の町として繁栄し、食文化も成熟し「食い倒れの町」という異名をもつようになりました。大坂でも町というのは大坂三郷（北組、南組、天満組の3組）、船場、島の内、天満辺りでその周辺は近郊農村でした。天保7年（1836年）の「新改正摂津国名所旧跡細見大絵図」によると、胡瓜は毛馬、大根は守口や田辺、蕪は天王寺、茄子は鳥飼や新家、まくわ瓜と人参は木津、白瓜は玉造と黒門および木津、くわいは吹田等々と各地に独特の野菜が産出されていました。

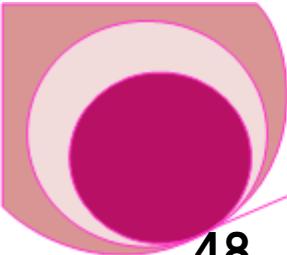
田辺大根は、白あがり京大根とねずみ大根が交雑したものが、江戸時代に田辺地域の土壤に根付いたと言われます。大正11年編纂の「東成郡誌」には「田邊町における大根は遠く三百年前より栽培せられ田辺大根の名は遠近に轟けり。・・・其の味すこぶる美にして、中流以上の家庭及び料理店等に歓迎せらる。本地にかくの如き風味ある大根の産する所以は、栽培に好適なると、農夫の栽培法に熟練せるによる」と、また大正十四年に編纂された「田邊町誌」には「本町にあっては遠い昔より其の風味すこぶる美にして、各方面の歓迎を受けたる大根を特産せり。^こ是れ当地の土質が大根の栽培に好適なると栽培法に熟練せるとによれるものにして、世に之を田邊大根と称し、其の名全国に聞こえたり。」と書かれています。

田辺大根は大阪を代表する大根でした。大正時代の田辺小学校の校章が大根のデザインとなったほど「田辺と言えば大根、大根と言えば田辺」であったと思われます。形質はハムのようにずんぐりとしてやや下膨れ。ネズミの尾のような可愛い根があります。白首で立派な葉が育ちます。生で食べると辛みがあり、煮ると甘みに変わります。

多様な料理に適し、愛された田辺大根ですが、戦後市場から姿を消し幻の野菜となります。理由は、生産地域の都市化、鉄道の発達で他府県から大量の大根が安く入荷される。伝統野菜の特徴で収穫された大根の形や大きさが不揃いで市場商品にしにくいなどがあります。

消滅したと思われた田辺大根ですが2000年に当時の大阪府立農林技術センターで種子が保存されていることが分かりました。「田辺大根ふやしたろう会」のメンバーが元の地域で復活させたいと種子を分けてもらい、田辺を中心に周辺地域の学校や人々に栽培してもらい復活運動に取り組んでもらいました。現在では「なにわの伝統野菜」のひとつとして見事に復活しました。12月の収穫期に地域の人々が栽培した田辺大根を持ち寄って品評会など「田辺大根フェスタ」が開催されます。現在もいろんな人々の参加でレシピ考案や加工食品開発でさらに普及が進んでいます。





48. 力石

所在：山坂2丁目19-23

東住吉100物語

寺社・史跡・伝承



神社境内によく見られる、角を丸くした大小様々な石で、幕末から明治・大正期に若者が力比べの余興や、訓練の用具として用いました。

また、占い神事にも利用され、若者が投げた石の向きで吉凶を判断したとも言われています。

山坂神社の境内にも約 75kg、120kg、150kg の 3 種類の力石が置かれていますが、現在は人が触れることもなく、不思議そうに眺める
さんけいしゃ参詣者があるに過ぎません。

山坂神社が大相撲春場所で九重部屋の宿舎となっていることから、元横綱千代の富士寄贈の力石も新たに並んでいます。

東住吉 100 物語

道路・街道・交通

49. 天王寺地区区画整理記念碑

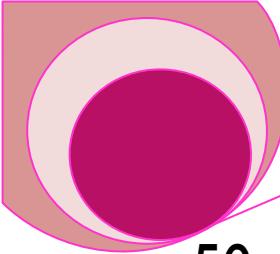
所在：北田辺 1 丁目 8

桑津墓地の南西角に、昭和 3 年（1928 年）から 30 年を掛けてこの辺りを区画整理する記念として、昭和 6 年（1931 年）に建立された記念碑があります。

碑文は当時の大阪市長・関一の揮毫きごうです。

阪神大震災により、倒壊の恐れが生じたので、平成 8 年（1996 年）3 月に再建されました。





東住吉 100 物語

産業・商業

50. 東部市場

所在：今林1丁目2-68

江戸時代大阪のまちの各地に分散していた魚市場や青物市場は、昭和の初めに、大阪市により福島区野田に統合され、中央卸売市場になりました。

戦後の市内人口の回復や、周辺都市、近隣府県の人口も伸びて消費が激増し、取扱量が毎年増加の一途をたどるとともに輸送手段の大型化・高速化が急速に進み、市場施設が狭く、過密となりました。

その打開策として東住吉区今林に第二中央卸市場（東部市場）の建設が計画され、昭和33年（1958年）11月より着工し、昭和39年（1964年）11月20日に施設が完成し、11月25日より業務が開始されました。

その後、取扱量の増加に伴い昭和52年（1977年）12月に施設の拡張を行い、加工食料品売場を移転し、引き続き昭和53年度（1978年度）から仲卸売場棟の全面改築工事を実施し、昭和56年（1981年）3月に完成了。

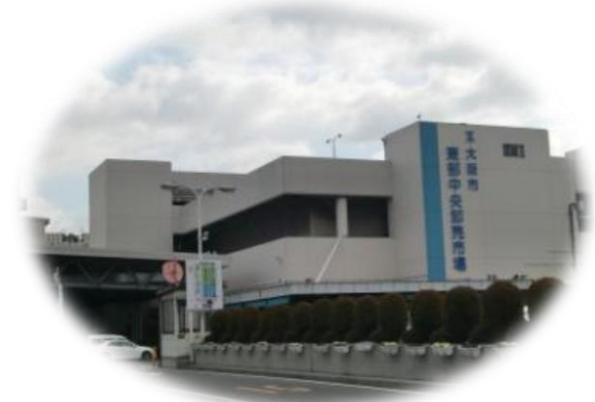
さらに平成12年（2000年）3月に流通の効率化を図るために、加工機能と配送機能を一体化した配送加工センターを新設しました。

しかし、開設当時からの施設の老朽化が著しく、機能的にも様々な課題が生じたことから、「効率的な物流の創出」と「食の安全・安心への対応」をコンセプトとして、平成20年（2008年）10月、再整備事業に着手し、平成24年（2012年）4月から一層機能的で使いやすい市場として生まれ変わりました。



・再整備後の規模

敷地面積 105,615 平方メートル
延面積 167,945 平方メートル



（大阪市中央卸売市場ホームページ：<http://www.city.osaka.lg.jp/shijo/index.html>）